

# ケアの人間学

合同研究会要旨集

No.3



2006年3月

## まえがき

浜渦 辰二

『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』No. 3 をお届けします。No. 2 の「まえがき」に、今後のケアの基本的動向として、「医療から福祉へ」と「施設から在宅へ」という二つの傾向を挙げ、この研究会での関心についても、「ターミナルケアから高齢者ケアへ」と「ホスピスケアから在宅ケアへ」という二つを挙げました。今回の No. 3 の目次を見ると、はっきりそういう傾向を読み取ることができると思います。しかし、それは単に関心が移ってきたということではなく、関心が広がってきたと理解していただきたい。施設ケアは在宅ケアとの繋がりのなかで、ターミナルケアは高齢者ケアとの繋がりのなかで、より大きな文脈のなかで考えられねばならないということなのです。関心の広がりとともに、参加者も、医療・看護の関係者から、福祉・介護の関係者へと広がってきました。これまで、ともすると、お互いの間に見えない垣根があって、なかなか接点のなかった二つの分野の方々が、「ケア」という言葉によって、問題を共有する場ができる。そのことだけでも、「ケア」という言葉をカタカナ書きのままに使う意義があるのではないか、と思っています。

もう一つ、No. 2 の「まえがき」で書いたこととして、私たち静岡大学のスタッフが、大学の3年生向けの総合科目として、「ケアの人間学」という授業を担当していることを報告し、『ケアの人間学』という教科書を制作する計画についても触れました。すでにご存じの方も多いと思いますが、昨年10月、無事に、浜渦辰二編『〈ケアの人間学〉入門』（知泉書館）を刊行する運びとなりました。早速、今年度の授業で使っていますが、それ以外でも反響はなかなか良く、あちこちの看護系や福祉系の学校で、教科書として使って頂けることになったという話も聞いています。また、同書の執筆者の一部により、昨年11月に、静岡市産学交流センター（B-nest）にて公開講座「いのちのケア」（代表：松田純）を開催し、多くの市民の方々にお話を聞いて頂きました。その機会に私が受けた依頼により、昨年12月には、ケアサポートみずき主催講座「ケアの人間学—高齢者ケアのために」（富士宮市総合福祉会館）、今年1月には、地域ケアマネ支援ネット研修会「ケアの人間学—スピリチュアルケアのために」（総合介護サービスセンターしずおかエン・フレンテ）という講演も行いました。「ケアの人間学」の輪がどんどん広がってきています。

ところで、昨年9月、私は、臨床パストラルケア教育研修センター（所長：ワルデマール・キッペス神父）の主催する「スピリチュアルケア（心と魂のケア）とホスピス研修旅行」（13日間、参加者19名）に参加し、フランスとドイツのホスピス5カ所、病院のスピリチュアルケア部4カ所、スピリチュアルケアワーカー研修センター3カ所を訪問、見学、インタビューして参りました。一部の方々には簡単な報告もいたしました。要点だけを紹介しますと、ドイツでは、ホスピスにも病院にも、必ず、医療のスタッフのなかにスピリチュアルケア（ドイツ語では、「Seelsorge＝魂のケア」と言います）に携わるスタッフがいます。患者や家族のスピリチュアルケアへの要求は高いし、それに施設で応える体制を持つことが、憲法でも規定さ

れています。何せ、国民の3分の2がキリスト教徒という国です。ドイツでは、スピリチュアルケアは、特定の宗派と結びつかないよう配慮されているにしても、宗教的なものと切り離せないのです。それに対し、日本では、第二次大戦後、戦時中の軍国主義と国家神道との癒着に対する反省により、政治、教育、病院などの公的な場面から、一切の宗教が排除されました。宗教的なものを排除するとともに、スピリチュアルなものも敬遠しているように思われます。しかし、日本にはスピリチュアルなものは必要ないのでしょうか、日本人にはスピリチュアルなものへの要求はないのでしょうか。キリスト教の伝統が国民的な広がりを持たない日本で、スピリチュアルケアをどう考えていったらいいのでしょうか。それは、日本ではすぐに「新興宗教」や「精神世界」や「オーラの泉」といった話になりかねませんが、もう少し、きちんとスピリチュアルケアについて考えられないでしょうか。これが、私がドイツから抱えて帰ってきた課題です。

これについても、No.2の「まえがき」でもすでに、「ケアとは、大きな宇宙的営みと一体化することを求めるものである」（水野治太郎『ケアの人間学』）という言葉や、「私とその人が、互いにケアしながら、〈より深い何ものか〉にふれる」とでもいうような経験を含んでいるのではないか」（広井良典『ケア学—越境するケアへ—』）という言葉を用いながら、「ケアすること」と「ケアされる」こととは、単なる「ギブ・アンド・テイク」の関係を越えて、それらがともにその上で支えられているような何か〈スピリチュアル〉なものへの関係のなかで初めて成り立っているように思われてくる、と書きました。

その後、これを、小澤勲『認知症とは何か』（岩波新書、2005年）と同『痴呆を生きるということ』（岩波新書、2003年）を読みながら、もう少し、日本的あるいは仏教的なものに繋げて考えられる手がかりを与えられました。後者のなかで小澤は、「労苦の多い長年の介護のなかで、彼らが「聖なるもの」としか言いようのない「なにか」に出会われるのではあるまいか。それはこれまでの人生、考え方、感じ方を大きくゆるがすようなものですらある」（『痴呆を生きるということ』）と書いています。この「聖なるもの」を、クリスティーン・ブライデン（オーストラリアの認知症体験の語り部）は、キリスト教の伝統に立って「霊性（スピリチュアリティ）」と呼びましたが、小澤はそれをむしろ、「生命の海」と呼んでいます。一つひとつのいのちが「波」のように、次々と繋がって大きな「海」となる「いのちのリレー」と呼ぶこともできるでしょう。その時、スピリチュアルケアとは、「いのちからいのちへと繋がる大きな物語」においてケアを考えるということでもあります。しかし、これについては、もう少し課題として考えていきたいと思えます。

なお、本誌No.1～No.3の刊行は、科学研究費による共同研究「生命ケアの比較文化論的研究とその成果に基づく情報の集積と発信」（基盤研究B-2：課題番号15320002：代表 松田純）の補助を得て可能になったものです。しかし、この共同研究は3年間のプロジェクトで、この3月をもって終了いたしますので、今後の刊行を継続するためには、合同研究会を会費制にするなどの方法によって、費用を捻出することを考えねばなりません。これについては、また、皆様のご協力を仰ぎたいと思えます。今後とも、よろしくお願いたします。

（「ケアの人間学」合同研究会幹事）